

イギリスにおけるフォーク・ゲームの 競技関係者に関する一考察

中 房 敏 朗

I : 序

現在のサッカーやラグビーの祖型とされる一種のボール・ゲームが、かつてブリテン諸島の各地に広く分布していた。それはたんなる私的な気晴らしであったのではなく、ある社会的意味をもった民俗として地域のなかに深く根を下ろしていたので、近年では「フォーク・ゲーム」と総称される。

フォーク・ゲームに対する学問的関心は比較的古い。周知のようにJ. ストラット¹⁾の古典的著作において早くもどんな競技であったのかの簡潔な描写がみられる。その後、多くの新資料がM. シェーマン²⁾、F.P. マグーン³⁾、M. マープルズ⁴⁾、R.W. マーカムソン⁵⁾によって発掘された。その結果、競技形態の実態をより克明に知ることができるようになったのみならず、競技の特質を学問的に規定する試みもみられるようになった。たとえば、E. ダニングとK. シャド⁶⁾はフォーク・ゲームを社会学的な視点に基づいて分析し、近代スポーツと対比させながら15項目にわたって「構造的特質」を抽出した。しかしながら、こうした先行研究に全く問題がなかったわけではない。従前の研究においては、ある特定の事例を不用意に一般論へと拡大解釈しがちであったこと、研究者の目が競技の一部の側面である試合の様相ばかりに奪われてきたこと、競技を分析するための方法論の短所に気づいていなかったことを指摘できる。筆者⁷⁾は、そうした問題点を克服するた

めに民俗学でいう調査項目に注目し、競技法、年代、実施時期、始球式、試合前後の慣行、経済的基盤のような項目を設定したうえで細かく考察した。その結果、従来まで印象的な見解に踏み留まっていたフォーク・ゲームの成立ちと地理的多様性の実態をより明確に知ることができた。しかし、フォーク・ゲームの競技関係者に関する諸もろの問題についてはまだ検討の余地を残しているといえる。

本稿の目的は、フォーク・ゲームがどんな人びとによってどのように構成されていたのかを年齢層、社会階層、人数、チーム編成⁸⁾、観衆、試合への参加圧力、女性の参加といった調査項目ごとに分析・考察することである。事例については既述のマグーン、マープルズ、マーカムソンらの歴史研究をはじめ我国では参照されることが少なかった民俗研究の文献から抽出した。また、筆者は1992年9月にイギリスを訪問し、現在でもフォーク・ゲームが行われている12箇所⁹⁾の地域をすべて調査する機会を得た。その過程で新たに得られた知見も少なくない。このようにして競技の人的構成や参加形態についてわずかでも知ることのできた事例は、別表(表1—3)のように地域にして47箇所になった。時代的には、ロンドンの中世の1例を除き、全ての事例は近世以降のものであり、とくに19世紀から20世紀に偏っている。したがって本稿の主たる対象は工業化以降の時代ということになる。

II：本 論

一口にフォーク・ゲームといっても行事性の有無によって大別する必要がある。ダニングとシャド¹⁰⁾が示唆しているように行事として行われるか否かによって競技の性格や構成要素が著しく異なるからだ。年中行事として定期的に行われるゲームは多くの儀礼的要素が加わるのに対し、比較的頻繁に行われる日常的なゲームは純粋に競技として行われる傾向が強い。また、前者は地域社会の公的行事であるのに対し、後者は特定の人々の私的娯楽として行われる傾向がある。ここではかりに前者を「行事として行われるゲーム」といい、後者を「随時に行われるゲーム」ということにする。

1. 競技関係者の年齢層

フォーク・ゲームはいかなる年齢層の人びとから構成されていたのか。従来の研究では見逃されていた問題である。競技者の中心は、時代を問わず、一般に成人に達した適齢期前後の若者であり、そしてその試合ぶりを高齢者が近くで観察していたという様子が窺える。たとえば古くは「年配者、長老連が若い衆の試合を見物」(ロンドン：1174年)とあり、18世紀でも「親や親方が自分の子どもや徒弟を応援」(ホーイック：1760年頃)とある。もっとも、高齢者がまるで試合に参加しなかったわけではない。ときに「経験豊かな年配者」が試合の途中で自分の味方チームに新たに加勢するようなこともあったし(ダービー：1829)、93歳で試合に臨んだというすこぶる達者な老人が現れたこともあった¹¹⁾(セント・コラム：1948年)。もとより「少年」や「若者」という表現しかみえない例はあっても(ウィットビー：1876年、ハクシー：1894年、ウェールズ南部の町：1840年頃)、高齢者が競技者の中心であったという例はさすがにみることができない。

なお、17歳以上(ホーイック：1760年頃、カークウォール：1850年頃～)、18歳以上(ダービー：1829年)

のように競技者の年齢が明確に記されている例があるほか、近年になって主に学童だけの競技に矮小化したところもある(セント・アイヴズ：1966)。他方、正規の成人による試合のほかに「少年の日」(ダービー：1839年、1845年)や「少年の試合」¹²⁾(カークウォール：19世紀後半～)、「少年用フード」で行う10歳代以下の試合(ハクシー：1986年)が設置されるなど、少年だけによる競技が実施されたところがある。このように競技を構成する人びとに確固とした年齢階梯がみえる事例があったことは特筆されてよい。これは人類学でいう年齢集団の存在を示唆するものであるが、蒐集された資料のみでは残念ながらこれを検証することはできない。

2. 競技関係者の社会階層

フォーク・ゲームの関係者はいかなる社会階層の人びとであったのか。これについては二つに大別して考える必要がある。コーンウォール州東部で行われたゴールへのハーリングやイースト・アングリアで行われたノーマル・キャンプなど、随時に行われるゲームの場合、比較的均質な社会階層の者が参集したとみられる。たとえば、イースト・アングリアのキャンプでは漁師、精錬工といった労働者どうしで行われ(1840年頃)、コーンウォールのハーリングでは百名に及ぶジェントルマンで行われた(1654年)。職業、地縁、血縁などを通じて既に知己の間柄の者やその友人たちが自分たちの楽しみとして行ったと考えられる。なお、試合の日取りや場所をアレンジしたのは、記録に残るものとしては紳士が多い。複数の紳士がマッチ・メイクをした例(コーンウォールのハーリング：1602年、ウェールズのナッパン：1603年)、一人の紳士が参加者を募り賞品まで提供した例(イースト・アングリアのキャンプ：1787年)がみられる。

いっぽう、行事として行われるゲームの場合、上流階級から労働者階級まで何らかのかたちで競技に関係していたと考えていいであろう。た

表1 年代およびチーム編成

			年代(西暦)	チーム編成
スコットランド	オークニー	カークウォール [バ]	c. 1850- Still Played	"Uppies[= 小道の上手側]" vs "Doonies[= 小道の下手側]"
	バースシア	カークマイケル	c. 1795	
	ミドロウジアン	スクーン	- c. 1790†	独身組 vs 妻帯者
	ロックスパーシア	インヴァレスク ホーイック ジェドバラ [バ]	1661?, 1795 c. 1760-1920? 1704- Still Played	既婚女性 vs 未婚女性 "Westla"[= 川の西側]" vs "Eastla"[= 川の東側]" 商人 vs 農夫 (~1970), "Uppies[= 市場より上手側]" vs "Doonies[= 下手側]" (1986)
レンフルー	メルロウズ	1866-1900†	妻帯者 vs 独身者 or 町の東部 vs 西部 → クラブ員 vs 非クラブ員: 1879	
ベリックシア	グラスゴウ ダンス [バ]	1573/74-1609 1724- Still Played	既婚者 vs 未婚者 (1953, 1986)	
イングランド北部	ノーサンバランド	アニック	1788- Still Played	妻帯者 vs 独身者 → セント・ミッシェル教区 vs セント・ポール教区: c. 1850
	カンバランド	ワーキントン	1775- Still Played	"Uppies[= 坑夫]" vs "Downies[= 水夫 & 港湾労働者]" (1903)
		ブromフィールド	c. 1770	"Uppies[= 坑夫 & 鉄鋼労働者]" vs "Doonies[= 海岸通りの住民]" (1986)
	ダラム	シースケイルズ セッジフィールド チェスター・ル・ストリート	1794? 1827- Still Played 1884-1930†	小売商人 vs 農民 (1884, 1896) "Down-street[= 小川の土手]" vs "Up-street[= 小川の上手]"
		カービー・グリンダライズ ウィットビー スカーボロ	c. 1900 1876 1870-94	
	ランカシア	ストーン・ハーベスト	c. 1900	"イングランド組" vs "フランス組" (c. 1900)
イングランド中部	リンカシア	ハクシー [ハクシー・フード]	1828- Still Played	
	レスタシア	ハラトン [瓶蹴り]	1790- Still Played	ハラトン vs メドボーン [= ハラトン以外の住民] (~1986)
	イースト・アングリア	[キャンプ・ボール]	c. 1440-1831	a: 12人 vs 12人 (19 C 初頭), 25人 vs 25人 (1815), 10人 vs 10人 (1822) 一般に10~15人 vs 10~15人 (1823) b: 学校 vs 学校 or 教区 vs 教区 or 3千人 vs 3千人, サフォーク出身 vs ノーフォーク出身 (18 C 末)
	ウォリックシア	ナニートン アサーストウン	1881 1927- Still Played	ウォリックシア出身 vs レスタシア出身 → 参加自由: 20 C 以降
	バッキンガムシア	ブレッチリー	1767	
	オックスフォードシア	オックスフォード	1632/33-1712	
	チェシア	チェスター	1533-40†	敵味方なし (1539)
ダービーシア	アシュボーン	1683- Still Played	川の北側 [= 山の手居住者] vs 川の南側 [= 下町居住者]	
	ダービー アシュフォード	1731-1847† 19 C 初頭	オール・セインツ教区 vs オール・ピーター教区	
ケンブリッジシア	ランドビーチ	c. 1720		
イングランド南部	ロンドン	ドーキング	1174, 1642, 1727? -30?	
	サレー	キングストン・アボン・テムズ ハンプトン・ウィック	1857-1903 (or 1905) † c. 1790-1866† 1815-1856†	
	ドーセットシア	コフ・カースル	1551-1966	テムズ・ストリート・クラブ vs タウン・セント
	デヴォンシア	バヴィー・トレイシー	1923	敵味方なし
	コーンウォール	同州のある町 (エクスター?) [ハーリング]	-1785† c. 1600-18 C 末	教区 vs 教区 a: 東 or 南方面の教区 vs 西 or 北方面の教区 所の教区 (1602), 州 vs 州 (1648) b: 15~30人 vs 15~30人 (1602)
		ボドミン [ハーリング] セント・コラム [ク]	1949-1954 1585- Still Played	"Town[= 町中の住民]" vs "Country[= 周辺の田舎の住民]"
		セント・アイヴズ [ク]	1862- Still Played	"トムズ" "ウィルズ" "ジョーンズ" vs その他のクリスチャン・ネーム (1886)
		トルーロ [ク] ニューキー [ク] ヘルストン [ク]	1886 1920s (復活) - c. 1880†	既婚者 vs 未婚者 主要道路沿いの住民 vs その他
ウェールズ	カーディガンシア	ランウェノグ	1719- c. 1800	"Bros[= 高地の住民]" vs "Blaenaus[= 低地の住民]" (c. 1800)
	ペンブルックシア	[ナッパン]	1573-1603	a: ネヴァーン教区 vs ニューポート教区, メリング教区 vs エグルィスフェロウ教区, ペンリス教区 vs ベンデドゥ教区, ケムス教区 vs エムリン教区 & カーディガンシア教区 b: 州 vs 州 or 何百人 vs 何百人 or 教区 vs 教区
	不明	ウェールズ南部のある町	c. 1840	

表2 競 技 構 成 者

競 技 構 成 者 (年齢・階級・支配者・人数・観衆・参加制限・女性)	
カークウォール [バ] カークマイケル スクーン インヴァレスク ホーイック ジェドバラ [バ] メルロウズ イェタム グラスゴウ ダンズ [バ]	あらゆる階層の何百人という人 (1883), 午前中の試合: 16歳以下の少年, 夕方の試合: 成人 (1986), 聖職者が始球式, 約200人の競技者 (1987) 生徒 (c. 1795) 紳士階級を含む教区全員が外に出て応援, その義務を怠れば罰金 (c. 1790) 女性のみ参加 (1661, 1795) 17歳以上の少年が主な競技者, 年長者が助長, 親や親方が自分の子どもや徒弟を応援 (c. 1760) 老若双方の住民 (1704), 禁止されたが肉屋組合員が行う (1706), 聖燭節の日の試合: "Jethart Callants", ファスターンズ・イーンの試合: 成人の住民 (1986) 試合を観戦するため遠くから人びとが訪れるが, 今はほとんど村の住民と丘の羊飼いに限られる (1866) 製靴業者がボール作製 (1573/74-1609) のらくら者全員 (1724), 荘園領主が始球式, 大勢の人々 (1884)
アニック ワーキントン プロムフィールド シースケイルズ セッジフィールド チェスター・ル・ストリート カービー・グリーンダライズ ウィットビー スカーボロ ストニーハースト	公爵が全面支援, 委員会を組織 (14人), 公爵専属の楽隊・城の担人夫が参与, 学校教師もプレイ (1884), 約300名の競技者 (1954) 4~5百人の労働者が参加, 5万人の観衆 (1903) 無月謝学校の生徒, 村人の関心事 (1770) 「女たちは皆走り出て, 喚声を上げるやら罵るやら」という俗語 (1794?) 教区書記がボール調達 (1827), 役員がボール提供 (1884), 教会の寺男が始球式, 人数無制限, 400人の競技者 (1887), 教区書記が始球式, 2~3千人の観衆 (1896), 教区書記と寺男がボール調達 (1941), パブリカンが始球式 (~1970), かつての名選手が始球式 (1991) 3~4千人を越す競技者 (1890) 学童 (c. 1900) 児童, 田舎の若者 (1876) 触れ役, 全階層でボールを賭う, 男性, 女性, 子ども (1890) 6~70人の大学生 (1904)
ハクシー [ハクシー・フード] ハラトン [瓶蹴り] [キャンプ・ボール] ナニートン アサーストウン ブレッチリー オックスフォード チェスター アシュボーン ダービー アシュフォード ランドビーチ	「ボギン」は神聖な人物で構成, 若者が参加 (1894), 300人も参加 (1932), 通称「ボゴン」という12人の組織, 土地のフットボールが一員になるのが普通 (1949), 「フール」 [=ボロを縫張りした衣服にまとう道化: 儀式の中心人物], および役員 (1894~), 粗麻のフード=子どもと10代, 革のフード=100人に及ぶ大人 (1986) 教区牧師宅に代表者が集まる (1892-5), 教区民, 人数無制限 (1966, 1986) a: 1人のジェントルマンがマッチ・メイク (1787), 同人数 (10~25人) どうしの対戦 (19C初頭), 25歳以下の未婚の若者 (1806), 3千人の観衆 (1822), 漁師, 鰻捕り, 渡舟乗り砲手, 製練工らの12人ずつ, 観衆 (19C初頭) b: サフォーク出身とノーフォーク出身の300人どうし (18C末) 何百という荒くれ者 (1881) 参加制限なし, 最初は女性や子どもも参加するが途中脱落 (1954) 労働者 (19C後半?) 町民, 女子はストゥール・ボール (1632/33) 市長にフットボールを献呈 (1533), 市長の立会下製靴業者が布地商にボール (1540) 医者から労働者まで全階級が関係, 2百人強の競技者, 大勢の観衆 (1888), 皇太子が始球式 (1928), 女性がゴール (第二次世界大戦中), 市職員, 僧職も始球式, 人数無制限ただし厳格な出生証明書 (1966), 何百人もの競技者 (1981) 肉屋の徒弟, 下層階級の楽しみ (1790), 大勢の群衆 (1796), 老いも若きも観戦 (1827), 少年の日 (1828), 他の教区民は直接参加しない, ときに年輩者も, 2~3千人の観衆, 競技者は18歳から30歳以上の既婚・未婚者, レスベクタブルな人々が応援 (1829), 下層階級のはかジェントリ, レスベクタブルな商人 (1835) 学校の生徒 教区牧師が競技参加者に金銭を支払うのが慣例 (c. 1720)
ロンドン ドーキング キングストン・アボン・テムズ ハンプトン・ウィック コーフ・カースル バヴィー・トレイン 同州のある町 (エクスター?) [ハーリング] ボドミン [ク] セント・コラム [ク] セント・アイヴズ [ク] トルロー [ク] ニューキー [ク] ヘルストン [ク]	青年, 労働者が競技者の中心, 年配者, 長老連, 金持衆も見物ないし参加 (1174), 徒弟 (1642), 少女はバーリー・ブレイク (1727), 若い衆 (1730) おきまりの人数の男や少年 (1857), 各層の住民, 近隣の諸町から大勢の人々, 途中で新しく加勢する (1887), 町の触れ役が試合開始の合図係 (1888) 身分の高い人も参加 (1815), 貧民階級, 公共団体の大部分は好意的 (1846), 慣例では市長が始球式 (1866) 気性の荒い連中 (1873) 誰でも自由に参加 (1887), 採石夫, 慣例では21歳まで組合加入不可 (1941) かつては貧民も紳士階級も参加 (~1785f) a: 複数のジェントルマンがマッチ・メイク, 教区民 (1602), 100名に及ぶジェントルマン (1654) 市長が始球式 (1949) 93歳の老人が参加 (1948), 前年の勝者が地元の名士が始球式, 女性も参加するようになる, 人数無制限, 何千人の競技者 (1986) 市長が始球式 (19C頃以降), 競技者は主に学童になる (1966) 観光客 (1920s)
ランウェノグ [ナッパン] ウェールズ南部の町	女性参加不可, 少女は兄弟や友人の声援 (1719), 貧富性差を問わず参加 (c. 1800) 2人のジェントルマンがマッチ・メイク, 労働者とその友人, 親類が参加, 何千人という競技者, 人数無制限, 商人, 呉服商, 行商人が出店を開く (1603) 若者, 通りのかどで女性がパンケーキを売る, 何千人という観衆 (c. 1840)

表3 典 拠 一 覧

	典 拠 一 覧
カークウォール [バ]	(3: p p. 332-3) (17: vol. 1, p. 135) (18: p. 242) (21) (29: p. 206) (34: p p. 7 and 104-5) (38: p. 74) (42: p p. 59-61) (43: p. 481) (50: p p. 129, 140, 180-2, 224-5, 240 and 298) (32: p. 124)
カークマイクル	(32: p. 125) (34: p p. 7 and 12) (46: p. 261)
スクーン	(23: p. 53) (32: p p. 124-5) (34: p. 13) (46: p p. 261-2)
インヴァレスク	(6: p. 750) (32: p. 121)
ホーイック	(6: p. 750) (29: p p. 145-6) (32: p p. 118-9) (34: p p. 39, 83-4 and 101)
ジェドバラ [バ]	(6: p. 129) (32: p p. 131) (34: p. 101)
メルロウズ	(6: p. 137) (32: p. 131) (34: p. 12)
イェタム	(32: p p. 105-6)
グラスゴウ	(3: p p. 122-3) (27: p p. 34-35) (29: p p. 86 and 146) (32: p p. 119-2)
ダンス [バ]	(4: p p. 123-4) (17: p. 135) (18: p. 242) (22: p. 40) (26: p. 225) (29: p. 206) (32: p. 126)
アニック	(34: p p. 101-2) (44: p. 79)
ワーキンントン	(5: p. 550) (17: p. 135) (23: p. 50) (29: 205-6) (32: p. 132) (34: p p. 85 and 105) (51) (52: p p. 7-8) (54: vol. 1, p. 27)
ブromフィールド	(32: p. 122) (33: p p. 35 and 86)
シースケイルズ	(32: p. 122)
セッジフィールド	(1: p p. 46-8) (3: p. 124) (22: p. 40) (29: p. 205) (32: p. 127) (34: p p. 104-5) (44: p p. 78-9) (46: p. 268)
チェスター・ール・ストリート	(3: p. 124) (5: p p. 180 and 191) (10: p p. 241-2) (22: p. 39) (23: p. 50) (32: p p. 127-8) (44: p. 79)
カービー・グリンダライズ	(32: p. 131)
ウィットビー	(32: p p. 131-2 and 138) (34: p. 13)
スカーボロ	(17: p. 135) (18: p. 241) (26: p. 227) (32: p. 132)
ストーンニューハースト	(32: p. 133)
ハクソン [ハクシー・フード]	(7: p p. 55-7) (17: p p. 221-3) (23: p p. 53-4) (29: p p. 136-7) (31: p p. 173-5) (33: p p. 82 and 84) (34: p p. 14-5) (38: p p. 72-5) (44: p p. 87-8) (55: vol. III, p. 221)
ハラトン [瓶蹴り] [キャンプ・ボール]	(8: p p. 250-1) (29: p p. 56-7) (34: p. 14) (44: p p. 86-7) (53: p. 41) (7: p. 205) (14: p p. 40-1) (15: p p. 91-6) (17: p p. 56-8) (23: p. 57) (28: p p. 88-92) (32: p p. 35-6) (34: p p. 6, 17, 32, 36-7, 97, 191 and 105-6) (49: p p. 259-60) (47: vol. II, p p. 809 and 814) (49: p. 94) (55: vol. I, p. 500)
ナニートン	(8: p p. 47 and 251-2) (32: p. 132) (34: p. 101)
アサーストウン	(8: p. 47) (22: p p. 39-40) (23: p p. 50-1) (26: p. 225) (29: p. 205) (34: p p. 104-5) (44: p. 78) (52: p. 35)
ブレッチリー	(8: p. 38)
オックスフォード	(32: p p. 77 and 106)
チェスター	(23: p. 52) (32: p p. 102-3) (34: p p. 12, 14 and 46) (49: p. 247)
アシュボーン	(8: p. 245) (13: p. 304) (22: p. 39) (26: p. 225) (29: p. 206) (32: p p. 107-112) (33: p. 145) (34: p p. 102-4) (44: p p. 77-8) (52: p p. 34-5) (53: p. 41) (57: p p. 3-6)
ダービー	(12: p p. 89-127) (18: p. 241) (26: p p. 202-4) (32: p p. 112-8) (33: p p. 37, 79, 84-5, 141-5 and 165) (34: p p. 84, 98 and 100) (44: p. 77) (57: p. 4)
アシュフォード	(8: p. 38)
ランドビーチ	(33: p. 58)
ロンドン	(32: p p. 106-7, 119 and 138) (48: p p. 84-5)
ドーキング	(18: p. 242) (20: vol. 1, p p. 243-4) (32: p p. 129-30) (33: p. 31) (34: p p. 12 and 101) (57: p. 7)
キングストン・アボン・テムズ	(2: p. 148) (24: vol. I, p p. 126-7) (32: p p. 112-4) (33: p p. 31, 139-41 and 143-4) (34: p. 100)
ハンプトン・ウィック	(24: vol. I, p p. 126-7) (32: p. 124 and 137) (33: p p. 31 and 141) (34: p. 13)
コフ・カースル	(26: p p. 30-1) (29: p p. 156-7) (32: p p. 104-5) (34: p p. 13-4 and 42) (44: p. 79) (49: p p. 247 and 270)
バヴィー・トレイン	(32: p. 138) (33: p. 13)
同州のある町 (エクスター?) [ハーリング]	(32: p p. 121-2)
ボドミン [ハーリング]	(9: p p. 73-5) (24: vol. II, p p. 504-5) (32: p. 83) (34: p p. 65 and 82) (45: p p. 52-5) (49: p p. 257-9) (47: vol. VII, p p. 502-4) (49: p p. 90-2) (55: vol. III, p. 287)
セント・コラム [ク]	(23: p p. 55-7) (34: p p. 13 and 105)
セント・アイヴズ [ク]	(10: p. 128) (22: p p. 40-1) (23: p p. 55-7) (29: p p. 144-5) (34: p p. 105 and 191) (38: p p. 72-3) (40) (44: p p. 79-80)
セント・アイヴズ [ク]	(10: p. 128) (22: p p. 40-1) (23: p p. 55-7) (29: p p. 144-5) (34: p p. 105) (38: p p. 72-3) (40: p p. 79-80)
トルーロ [ク]	(10: p. 128) (23: p p. 55-7)
ニューキー [ク]	(34: p. 105)
ヘルストン [ク]	(7: p p. 57-8) (10: p. 128) (38: p p. 72-3)
ランウエノグ [ナッパン]	(14: p p. 29-30) (18: p p. 243-4) (23: p p. 51-2) (57: p p. 45-6)
ウエールズ南部の町	(37: p p. 270-82) (43: vol. VIII, p. 482)
	(32: p. 128)

凡 例 (表1~3に共通する)

1. イースト・アングリアとあるのは、サフォーク、ノーフォーク、エセックス。
2. ランウエノグとあるのは、1719年の事例に限りランウエノグを含む。
3. [] とあるのは、ゲーム名。無記名はフットボール。
4. a: とあるのは、随時に行われるゲーム
4. b: とあるのは、行事として行われるゲーム
5. →: とあるのは、変更とその時期。
6. †とあるのは、その年を最後に中止。

※フォーク・ゲームが行われていた年代を表1に参考として付しておいた。文献で確認できる最古と最近の事例の年代であり、表記された年代の間、間断なく行われた確証はない。

たとえば「あらゆる階級の何百人」(カークウォール：1883年)、「紳士階級を含む教区全員」(スクーン：1790年頃)、「医者から労働者まで全階級が関係」(アッシュボーン：1888年)、「貧富を問わず参加」(ランウェノグ：1800年頃)といった記述がみられる。しかし、競技者の中心はやはり職人や商人をはじめとする労働者階級であったことは疑いなく「下層階級の楽しみ」(ダービー：1790年)、「気性の荒い連中」(ハンプトン・ウィック：1873年)、「のらくら者」(ダンス：1724年)といった表現が注意を引く。

ところで、この項目において繰り返し議論になるのが、上流階級が試合に関与したのかという問題である。ダニングとジャド¹³⁾は貴族やジェントリも競技に参加するのが通常であったと捉え、そのことによって権力者——中世では国王、近代では市当局(と彼らはいう)——の度重なる禁圧政策にもかかわらず競技が存続しえたと考えた。ところが初期工業化の時代に貴族やジェントリは「地位排他的」¹⁴⁾になり、民衆へのパタナリズムから撤退した結果多くの地域でフォーク・ゲームが衰退したと考えた¹⁵⁾。フォーク・ゲームの衰退原因の問題はさておき、上流階級がはたして競技に関与したのかという問題に絞って、いましばらく検討していくことにしたい。

試合開始の始球式は衆目の注意を集める単純だが重要な儀式であったが、この役割に従事できたのはたいてい地元の名士であったことを強調しておきたい。たとえば荘園領主(ダンス：1884年)、教会の寺男(セッジフィールド：1887年)、教区書記(セッジフィールド：1896年)、町の触れ役(ドーキング：1888年)、市長(ボドミン：1949年、キングストン・アボン・テムズ：1866年、セント・アイヴズ：1986年)、町の名士¹⁶⁾(セント・コラム：1986年)などの例があり、アッシュボーンでは英国皇太子が始球式を行ったときさえあった(1928年)。試合が始まっても労働者階級のほかに「レスペクタブルな人びと」(アッシュボーン：1829年、1835年)や紳士もたいてい臨席したうえ(ロンドン：1174年、スクーン：

1795年頃)、資料上では少ないが、紳士たちが直接参加した例さえ確認できる(キングストン・アボン・テムズ：1815年、ダービー：1829年、1835年、デヴォンシア：1785年頃)。また教区牧師が慣わしによってフットボール参加者に金銭的援助をしていた例もある(ランドビーチ：1720年頃)。マーカムソン¹⁷⁾が指摘しているように公然と競技を実施するためには支配階層にコンセンサスが広くゆきわたっている必要があり、少なくとも黙認的な態度が条件であったと考えられる。他方、この種の競技が度たび当局から禁止されたり¹⁸⁾、エンクローチャーに対する異議申し立てや食糧暴動の契機として行われた¹⁹⁾ことに示されるように、フォーク・ゲームがときに階級間の対立の種になる場合があった。しかし、これらの事例は恒常的状态であったというよりもどちらかといえば特別な事態であったというべきであろう。町当局と競技構成者との間の不和や反目はしばしば年中行事として行われてきた競技の歴史に終わりを告げるまさに最終局面に現れたのである。

3. 競技者の人数

試合は何人で行われたのか。マーブルズ²⁰⁾、ダニングとジャド²¹⁾はフォーク・ゲームの特徴のひとつとして競技者の人数が無制限であることを挙げている²²⁾。しかし競技者の人数についてはマーカムソン²³⁾の見解に傾聴すべきであろう。確かにマーブルズらのいうように参加者の人数に一定の限度がないゲームもあったのだが、マーカムソンがいうように構成人数が慣例的に決まっているゲームもあったからである。この相違点は競技の規模と深く関連していると考えられる。

「恒例の人数」(ドーキング)で行われたという例はべつとして、行事として行われるゲームの場合、競技者が数百人を越えることも珍しくなく、一般に人数上の規制はなかったと考えてよい。このような競技では人数上の要因によっ

て勝敗が大きく左右することは少なく、人数を厳密に規制する特別な理由がなかったといえる。人数に制限がなかったというばかりではない。競技者の人数は試合中どんどん変動するのが普通であった。中村²⁴⁾が指摘しているように、競技者は始終試合に参加しているとは限らなかったからである。試合が何時間も続くことが珍しくなかったのが、適時休息をとったのだ。時どき「エールを飲んだり……パンケーキをたっぷり食べたり」(ウェールズ南部の町：1840年頃)、「誰だってそこ〔居酒屋〕で一杯やらないではいられなく」なり(アッシュボーンで歌われた唄：1821年)、「疲れた者はオレンジや飲物が手渡される」(ダービー：1829年)などして、試合から勝手に離れたり途中から試合に参加したりしたのである。いっぽう、ゴールへのハーリングやノーマル・キャンプなど、随時に行われるフォーク・ゲームでは、慣例として事前に人数——ゴールへのハーリングは15～30人、ノーマルなキャンプは10～30人——が定められていた。こうしたゲームでは人数の不均衡がそのまま勝敗に結びつきやすく、事前に人数を揃えておく必要があったからだと考えられる。

4. チーム編成

敵味方をどのように定めたのか。マグリーン²⁵⁾は行事として行われるゲームの特徴のひとつとして、対抗する地域集団によってチームが編成されたことを指摘した。しかしながら、それに妥当しないゲームがあったのである。たとえば、ハクシー・フード²⁶⁾は各競技者が互いに敵である状態でボールを奪い合い、アニックでは正規の競技終了後、再度中央でボールを投げ上げ、それを持ち去った者がボールの所有権を得るといふ小競技が行われたが、そこでは正規の競技中のチーム編成は完全に消失した。混戦型球技としてはこの種のチームを編成しないで行うゲームがプリミティブな形態であったとみられる。

もっともチームを編成するゲームがやはり圧倒的に多く、分布状況もオークニー島からコーンウォール州まで広範囲に及ぶ。チーム編成の基準は慣例によって変わらないところもあれば、ときに変わるところもあった。コーンウォール州西部の郊外へのハーリングやウェールズのナッパンのように、さまざまなチーム編成で試合をしたところもあれば、毎年同じチーム編成で試合をしたところもあったのである。なお、チーム編成の基準は大きく二つに分類することができる。町の東側対西側、川の上手対下手のように地理的基準によって編成される場合と、小売商人対農民、既婚者対未婚者²⁷⁾のように社会的地位によって編成される場合とである。その他、珍しい例としては“Toms”，“Wills”，“Johns”という特定の名前の者が連合して他のクリスチャン・ネームの者と対戦するところがあった(セント・アイヴズ：1886年)。

ただしこれについては異なる二つのコミュニティ——イギリスでは教区が一単位——の間で対戦するか、一つのコミュニティを二つのチームに分けて対戦するかという区別がより重要であろう。そのいずれであるかによって相手に対する互いの敵愾心の強さが異なってくるのみならず、敵のプレイが予測しにくい、敵の行動の真意をつかみにくい、何をされるかわからないなど、競技者の心理や行動に微妙な違いを与えると考えられるからである。さらにまた、そうしたチームの分け方の違いにより、同一のコミュニティの内部では当然機能している相互規制や集団的規範がチーム間で共有されるか否かという相違が生まれてくると考えられるからである。このような区別は、ダニングとシャド²⁸⁾が提示したいわゆるスポーツにおける暴力の問題を考える上でも不可欠であることを示唆しておきたい。

5. 観衆

ダニングとシャド²⁹⁾はフォーク・ゲームの

重要な特徴として、競技者と観戦者の区別が曖昧であったと考えた。この点を資料上で確認することは難しいが、ときに観戦者が試合の中に無理に引きずり込まれたという例は確かに見ることができる。ダニングとシャドが競技者と観衆の区別が「曖昧」と判断したナッパンの事例(1603年)はいうまでもなく、ハラトンでも同様にボールに群がる集団が観戦者に向かってわざわざ突入し試合に巻き込むという行動が観察された(ハラトン:1986年)。行事として行われるフォーク・ゲームは本来、他人に見せるためのものではなく自分たちのために行う祝祭行事であったということができる。しかも比較的小さく閉ざされた社会の中では、理由もなく社会全体の共通の関心事に背を向けたり、観戦者として競技から身をひくことは許容しがたい行為であったと想定されるのである。

しかし、それも程度の問題であるといえる。大勢の他所者が競技に参加し、しかもその数が無視できない人数——たとえば20世紀ではセッジフィールドで2, 3千人、ワーキントンでは近隣の町々から5万人の見物人が鉄道で運ばれてきた——になると、やはり誰でも自由に競技に参加させるわけにはいかなかった。素性の知れない他所者が競技を占拠し、地元住民の著しい反感を買う恐れさえ出てくる。A. デルヴズ³⁰⁾の綿密な事例研究が示しているように、ダービーの競技が1840年代になって禁圧された理由の1つは、急激な住民人口の膨張に伴い競技者の行為が極端に無軌道化したことであった。アシュボーンでは他所者の参加を完全に締め出すために、参加者には厳格な出生証明書があるようになったのも(1966年)、不思議なことではない。競技者と観戦者の区別が曖昧であったとしたダニングとシャドの見解は必ず一般化できるとは限らないのだ³¹⁾。

6. 試合への参加圧力

フォーク・ゲームの特徴としてダニングとシ

ャド³²⁾は、地域社会からの「参加への圧力」が強く作用したことを指摘した。しかしこの点も厳密に考える必要がある。確かに「社会的圧力」すなわち試合に参加することを強いられていたところもあったが、参加するかしないかは個人の自由な意志にほとんど委ねられていたところもあったからである。たとえば、スクーンのように「自分の属する側のチームを応援しなければなら」ず、その役目を怠った者は「罰金」を課せられるという強い参加(または参与)への圧力があつたところもあれば、アサーストウンのようにほとんど強制はされず、参加したければ子供でも女性でも自由に参加できたところもあったのである。

さらに指摘しておきたいのは、彼らのいう「社会的圧力」が強く作用していた地域でさえ特定の者が参加できないという参加規制が働いていたところがあつたことである。たとえば、ある年齢に達しないと競技に参加できないという厳格な年齢階梯がみられたところ(ダービー:1839年, 1845年, ホーイック:1760年頃, カークウォール:1850年頃~), 町の住民でなければ参加できなかったところがあつた(アシュボーン:1966年~)。したがってダニングとシャドのいう「社会的圧力」は参加を強いられる者もいれば、逆に締め出される者もいたという選択的な力であり、しかもその「圧力」の強さには地域差があつたと考えるべきであろう。そこで見落とせないのが次項の女性である。

7. 女性の参加

中村³³⁾がいうように、一般に女性はフォーク・ゲームに参加できないという暗黙の規制があつたとみられる。たとえば、地元の競技に参加できなかったある女性が1710年10月19日付の手紙で「私は兄の代わりに少年に生まれ代わって教区のために闘いたい」と書いている(カーディガンシア)。なによりもまず資料上には女性への言及がほとんど見られないことに留意してお

きたい。たとえば、フォーク・ゲームの典型であるとダニングによって認定されたナッパンの事例には「見物は許されず全員が参加しなければならない」と記述されているにもかかわらず女性はどこにも言及されていないのである。17世紀のイングランドについてB. リエイ³⁴⁾は、民衆の女性は五月祭や収穫祭のような祭りには大勢参加したのに対し他のスポーツでは観戦者であったと述べているが、ダニングとシャドのいう「圧力」も性差を考慮しなければならないといえるであろう。

もっとも、女性はただたんに傍観者として競技から身を引いていたのではなく、なかには積極的に競技に係わろうとしていた者もいたようである。たとえば「少女たちは兄弟や友人を援護しようと走ったり、声を張り上げたり」(ランウェノグ: 1800年頃)、「女たちは皆走り出て、歓声を挙げるやら罵るやら」(ブロムフィールドの俗謡: 18世紀末)、ところによっては「町の角でパンケーキを配った」(ウェールズ南部の町: 1840年頃)など、女性も間接的ながら競技を支援していたことが窺える。また、資料には言及されないが、当日にふるまわれる食事やパンケーキ、試合後の晩餐のためにと、ことせわしく舞台裏で働いていたこともまた十分想像されるであろう。このような女性の役割は決して軽視することはできず男たちの競技はある意味で女性によって支えられていたといわなければならない。

さらに女性も男性に交じり参加した例もいくつかあるし(ランウェノグ: 1800年頃、アサーストウン: 1954年)、近年になって女性の参加が認められた例(セント・コラム: 1986年)、バーリー・ブレイクやストゥール・ボールなど女性は別種の競技を行った例(ロンドン: 1727年、オックスフォード: 1632/33年)が稀にある。女性はいつも試合の脇役に甘んじていたわけではなかった。ゴールまでボールを到達させるという最大の榮譽を獲得した女性さえ今世紀に登場したのである(アッシュボーン: 第二次大戦中)。さらにカークウォール³⁵⁾(1945-6年)やインヴァレスク(18世紀末)では女

性だけで競技が行われた。ともにスコットランドであったという点はこの際注意を喚起しておきたい。港に近いインヴァレスクの女性は魚売りを生業とし、祝日にはゴルフをしていたというが、このような普段の生活形態が女性を主人公とする競技を可能にさせていたと考えられる。

Ⅲ：結 語

ほんらい地域間で異なるフォーク・ゲームの特徴を他と混同しないように分析しながら、競技がどんな人びとによってどのように構成されていたのかを考察してきた。その結果、これまで印象的な見解に踏み留まっていたフォーク・ゲームの人的構成や参加形態の実態がより鮮明になった。競技者を構成する年齢層や社会階層はどの地域でもほぼ同様であったが、参加への圧力やチーム編成のしかたは地域差が比較的大きかった。たとえば、既婚者対未婚者というチーム編成は北端のスコットランド、イングランド北部諸州の一部と、南端のコーンウォール州の一部の教区にしか見られなかった³⁶⁾。女性の参加についても同様に時代と場所によって参加形態が異なるといえる。

このように競技構成者や参加形態が地域によって異なったのはなぜだろうか。この問題については、これまでにいくつかの示唆的な見解がみられる。たとえば、岸野³⁷⁾はイェンゼンによる指摘として、未開民族の儀礼競技のチーム編成が彼らの社会組織と密接に関係すると述べている。いっぽう、J.R. ギリス³⁸⁾によれば、ヨーロッパの祝祭行事における若い男女の組織的な役割は、工業化以前に広く分布していた既存の若者集団のひとつの表現形態であり、同職組合や同業組合としばしば対をなしていたという。なおまた、N.Z. デーヴィス³⁹⁾は近代初期フランスで行われた祝祭慣行がいかに強く共同体と若者の活動の現実に密着していたかを強調している。これらのことから類推すると、イギ

リスのフォーク・ゲームも同様に、各地の競技の人的構成や参加形態は既存の社会集団、とくに若者集団とその活動形態によって強く規定されていた可能性がある。しかし本稿で蒐集された資料だけでは、インヴァレスクの事例を除いて、その関連をとくに確認することはできなかつた。こうした視点による新たな資料の発掘が待たれる。この問題はより社会学的な分析を要するものでもあり、稿を改めて考察することにしたい。

註

- 1) J. ストラットは最も早くハーリングやキャンプに着目した研究者の一人であり、18世紀末の萌芽期の民俗学の観点からその競技形態を描写した(49: pp. 90-4)。
- 2) M. シェーマンはフォーク・ゲームをフットボールの起源の一つとして位置づけた(46: pp. 257-62)。この見解は後の研究者に受け継がれていくことになる。
- 3) F.P. マグーンは文学作品から多くの事例を抽出したのが特徴といえる。彼はまたフォーク・ゲームに初めて本格的に学問的なメスを入れた(32: pp. 134-8)。
- 4) M. マーブルズはフォーク・ゲームを含むフットボールの歴史を初めて批判的に考察した。フォーク・ゲームに関しては起源論と産業革命期における衰退原因の分析が秀逸である(34: chap.1 and chap.8)。
- 5) R.W. マーカムソンはとくに支配者側の公的文書の資料を発掘したのが特徴である(33: chap.3)。
- 6) E. ダニングとK. シャド(14: pp. 30-1)。
- 7) 中房敏明(35)。
- 8) 人類学では「対抗」という項目名が使用されるが、一般にはなじみにくいと思われるので「チーム編成」とした。なお岸野雄三も「チーム編成」という語を使用している(30: p. 203)。
- 9) 表1の中の項目「年代」において“Still Played”と記されている12箇所の地域。
- 10) ダニングとシャド(14: p. 30)。
- 11) セント・コラムの競技で始球式をした最高齢者は99歳であった(40: p. 13)。
- 12) カークウォールの“Tankerness House Museum”の職員に伺ったところによると、「少年」とは16歳以下の者であるということである。
- 13) ダニングとシャド(14: p. 42)。
- 14) A. グートマンは、ダニングとシャドが好んで使用する「地位排他性」という便利な言葉に対してやや疑問を示している(19: p. 225)。
- 15) このダニングとシャドの見解に対してD.A. レイドは歴史家の立場から資料操作の問題をはじめ、かなり厳しく批判している(41)。
- 16) セント・コラムで競技の始球式を行った歴代の町の名士には主教、海軍中將、国会議員、地元出身のプロクリケット選手、ラジオやテレビのパーソナリティーといった面々がいる(40: p. 13)。
- 17) マーカムソン(33: p. 67)。
- 18) 古くは1314年から都市部を中心に再三禁令が公布されたことはよく知られている(14: p. 28)。
- 19) 1724年の事例がある(33: pp. 38-41)。
- 20) マーブルズ(34: p. 95)。
- 21) ダニングとシャド(14: p. 30)。
- 22) 参加者の人数が無制限であると初めて指摘したのは、おそらくシェーマンである(46: p. 268)。
- 23) マーカムソン(33: p. 36)。
- 24) 中村敏雄(36: p. 53)。
- 25) マグーン(32: p. 144)。
- 26) 一部の書物では「フード・ゲーム」と記述されているが、筆者が地元の人に聞いたところによると「ハクシー・フード」と呼ぶということである。
- 27) 既婚者対未婚者というチーム編成は、文献上ではJ. チャップマン作の喜劇『サー・ジャイルズ・グースキャップ』(1601-3年頃)の台詞に見えるのが初見とされる(32: p. 44)。
- 28) ダニングとシャド(14: pp. 35-37)。なおフォーク・ゲームの試合で死者が出た——ダービーで1796年に1件、イースト・アングリアのキャンプで18世紀末に2件——のは教区対教区のような異なるコミュニティどうしの試合であったことを指摘しておきたい。
- 29) ダニングとシャド(14: p. 30)。

- 30) ダービーの告解火曜日のフットボールが市当局によって禁圧される過程を綿密に解明したA. デルヴズの秀れた事例研究がある (12)。
- 31) 観衆の問題という点では、柳田国男の見解が注目に値する (56 : p. 182)。彼は祝祭行事の歴史的变化のなかで重要なことは観衆の登場であるとし、参加者と観衆を隔てるのは「信仰」の相違であるとした。スポーツにおける観衆の問題も場合によってこうした観点の考察が必要であろう。
- 32) ダニングとシャド (14 : p. 30)。
- 33) 中村 (36 : p. 24)
- 34) B. リエイ (39 : p. 11)。
- 35) カークウォールでは第二次世界大戦後の1945年と46年の2回だけ女性のみのゲームが行われた (21 : pp. 4 and 104)。なおカークウォールの“Tankerness House Museum”の職員によると現在、女性は観るだけで応援したり食べ物や飲み物を渡したりするということである。
- 36) この分布的偏りについてはマーブルズも指摘している。なおイギリスだけではなく、大陸のノルマンディーでも見られたという。(36 : p. 13)。
- 37) 岸野 (30 : p. 203)。
- 38) J.R. ギリス (16 : p. 103)。
- 39) N.Z. デーヴィス (11 : pp. 115 and 143)。
- (rpt. : *Border Regional Library*, Selkirk, 1990) .
- 7 : Brailsford, D., *Sport and Society: Elizabeth to Anne*, London, 1969.
- 8 : Bushaway, B., *By Rite: Custom, Ceremony and Community in England 1700-1800*, London, 1982.
- 9 : Carew, R., *The Survey of Cornwall*, London, 1962 (rpt. : Da Capo Press, Amsterdam, 1969) .
- 10 : Courtney, M. A., ‘Cornish Feasts and “Feasten” Customs’, in; *Folk-Lore Journal*, IV (1886), pp. 109-249.
- 11 : Davis, N. Z., ‘The Reason of Misrule: Youth Groups and Charivaris in Sixteenth-Century France’, in; *Past and Present*, no. 50, 1971, pp. m 41-75.
- 12 : Delves, A., ‘Popular Recreation and Social Conflict in Derby’, in; Eileen and Stephen Yeo (ed.), *Popular Culture and Class Conflict 1590-1914*, Sussex, 1981.
- 13 : Dudley, E. ‘An Old Time Custom’, in; *The Field*, March 8, 1888, p. 304.
- 14 : Dunning, E. and Sheard, K., *Barbarians, Gentlemen and Players: A Sociological Study of the Development of Rugby Football*, Oxford, 1979.
- 15 : Dutt, W. A., ‘The Last Camping Match’, in; *Badminton Magazine*, vol. IX (1899), pp. 91-6.
- 16 : Gillis, J. R., *Youth and History—Tradition and Change in European Age Relations 1770-Present*, New York, 1981.
- 17 : Gomme, A. B., *The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland*, 2vol., London, 1894-98.
- 18 : Gomme, G. L. *The Village Community*, London, 1890.
- 19 : Guttmann, A., review to; Dunning, E. and Sheard, K., *Barbarians, Gentlemen and Players: A Sociological Study of the Development of Rugby Football*, Oxford, 1979. in; *Stadion*, V-2, 1979, pp. 287-90.
- 20 : Hazlitt, W. C., *Faiths and Folklore of British Isles*, 2vols., London, 1905 (rpt. : Benjamin

引用・参考文献

- 1 : Anon., *Customs and Traditions of Northumbria*, Warkworth, 1991.
- 2 : Anon., ‘Foot-Ball at Kingston-Upon-Thames, on Shrove Tuesday’, in; *The Illustrated London News*, February 28, 1846.
- 3 : Anon., ‘Notes, Queries, Notices, and News’, in; *The Folk-Lore Journal*, I, 1883, pp. 332-33.
- 4 : Anon., ‘Notes and Queries’, in; *The Folk-Lore Journal*, II, London, 1884, pp. 122-24.
- 5 : Anon., *The Monthly Chronicle of North-Country Lore and Legend*, Newcastle-Upon-Tyne, 1889.
- 6 : Bordes Regional Council (ed.), *The Southern Counties’ Register and Directory*, Kelso, 1866

- Blom*, New York, 1965).
- 21 : Hewison, W. S. and Robertson, J. D. M., *The Ba' 1945-1959*, Kirkwall, not date .
- 22 : Hole, C., *English Customes and Usege*, London, 1941.
- 23 : Hole, C., *English Sports and Pastimes*, London, 1949.
- 24 : Hone, W., *The Every-Day Book*, 2vols., London, 1826-27 (edn. 1864).
- 25 : Jewitt, L., 'On Ancient Customes and Sports of the County of Derby', in; *Journal of the British Archaeological Association*, VII, 1852, pp. 199-210.
- 26 : Johnson, W. B., 'Football a Survival of Magic?', *The Contemporary Review*, CXXXV (1929), pp. 225-31.
- 27 : Johnston, R. G., *Duns Dings A'*, 1953.
- 28 : Ketton-Cremer, R. W., 'Camping—a forgotten Norfolk Game', in; *Norfolk Archaeology*, XXIV (1932), pp. 88-92.
- 29 : Kightly, C., *The Customs and Ceremonies of Britain: An Encyclopaedia of Living Tradition*, London, 1986.
- 30 : 岸野雄三『体育史』大修館書店, 1971年.
- 31 : MacKinlay, J. M, F. S. L. 'The Hood-Game at Haxey', in; *Folk-Lore*, VIII, London, 1897, pp. 173-75.
- 32 : Magoun, F. P. Jr., *History of Football from the beginning to 1871*, Kölner Anglistische Arbeiten, Band 31, 1938.
- 33 : Malcolmson, R. W. *Popular Recreations in English Society 1700-1850*, Cambridge, 1973 (edn. 1981).
- 34 : Marples, M., *A History of Football*, London, 1954.
- 35 : 中房敏朗「イギリスにおけるフォーク・ゲームの成立ちとその多様性に関する研究」 in;『スポーツ史研究』第4号, 1991年, pp. 33-48.
- 36 : 中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』三省堂, 1985年.
- 37 : Owen, Sir George, *The Description of Pembrokeshire*, 1603, Owen, H. (ed.), Cymrodorion Soc. Res. Ser. no. 1, 1892.
- 38 : Peacock, M. 'The Hood-Game at Haxey', in; *Folk-Lore*, VIII, London, 1897, pp. 72-75.
- 39 : Reay, B., 'Introduction: Popular Culture in Early Modern England', in; *Popular Culture in Seventeenth-Century England*, London, 1988 .
- 40 : Rabey, I., *The Silver Ball: The Story of Hurling at St. Columb*, St. Columb, 1991.
- 41 : Reid, D. A., 'Folk-football, the Aristocracy and Cultural Change: A Critique of Dunning and Sheard', in; *The International Journal of the History of Sport*, vol. 5 number 2, 1988, pp. 224-238.
- 42 : Robertson, J. D. M., *An Orkny Anthology*, Edinburgh, 1991.
- 43 : Rorie, D., 'New Year's Day in Scotland', in; *Folk-Lore*, XX, London, 1909, pp. 481-82.
- 44 : Roy, C., *Old English Customes*, London, 1969.
- 45 : Rule, J., 'Methodism, Popular Beliefs and Village Culture in Cornwall, 1800-50', in; Robert D. S. (ed.), *Popular Culture and Custome in Nineteenth-Century England*, London, 1982.
- 46 : Shearman, M., *Athletic and Football*, London, 1887.
- 47 : Simpson, J. A. and Weiner, E. S. C. (prep.), *The Oxford English Dictionary*, Second ed., Oxford, 1989.
- 48 : Stow, J., *The Survey of London*, London, 1603 (edited by Wheatley, H. B., 1987).
- 49 : Strutt, J., *The Sports and Pastimes of the People of England*, London, 1801.
- 50 : Tait, C., *The Orkney Guide Book*, Kirkwall, no date (c. 1990).
- 51 : Wallance, K., *The Barbarians of Workington: Uppies v Downies*, Cumbria, 1991.
- 52 : Wright, A. R., 'The Folklore of the Past and Present', in; *Folklore*, XXXVIII, 1927, pp. 13-39.
- 53 : Wright, A. R., *English Folklore*, London, 1928.
- 54 : Wright, A. R., *British Calender Customs: England*, 3vols., London, 1936-40.
- 55 : Wright, J. (ed.), *The English Dialect Dictionary*, Oxford, 1898.
- 56 : 柳田国男「日本の祭り」 in;『定本柳田国男集』10, 筑摩書房, 1969年.
- 57 : Young, P. M. *A History of British Football*, London, 1968.

A study on the participants of the folk-games in Britain

Toshiro NAKAFUSA

The purpose of the this paper was to make clear the participants of the folk-games in Britain. I could collect 47 towns or regions where I have found recorded the participant of the folk-games. I explored these collected instances in folkloric aspect: who regulate and manage games, what people participate in them, the games were played by children or adults, how are the sides chosen, or played between two communities or two divisions of a community ? and so on.

I impressed on geographical variety in participating of folk-games. In general the age group and social class of the participants was almost alike everywhere. But communal pressure to participate and way of choosing sides was variety in local tradition. One of the most striking feature of them is the composition of the groups of opposing players: parish against parish, one side of a community against another, town against country and once, most curiously, unmarried against married women. Bachelors against married men, for example, was only recorded from some parishes in Scotland, the north country and Cornwall. The way of female participate of the game also was variety. Although the largest role that women could hope for in games was that of spectator, women was the only person who could play game in Inveresk and Kirkwall.